

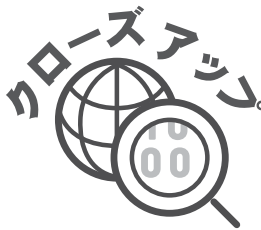
ESG議論に本気度を

再エネ移行期支援に事業機会

GBJシンポジウム2023



(左から) 似内氏、高橋さん、木下氏、池田氏、柳瀬氏



「ESG（環境・社会・企業統治）が大きな社会変革を起す」としている。変化に対応した者だけが生き残るといふサバイバルリスクがある一方で、大きな事業機会でもある。この点の議論の本気度が足りないのではないか。こうした問題意識の下、グリーンビルディングジャパン（GBJ）は「グリーンビルディング革命／地球沸騰時代のビジネスチャンス」をテーマとしたシンポジウムを開いた。パネルディスカッションでは、グリーンビルディング（GB）の普及加速に向けたポトルネックやビジネスチャンスについて、金融、開発投資、環境・健康建築評価など各分野の専門家が議論を展開した。

ポトルネックは、パネリストの意見が一致している。形成の2点をポトルネックに挙げ、「経済性を上げると持続可能性が下がる。担当者はどうしても経済性を選んでしまつ」と本音を語った上で、「サステナビリティに軸足を置いて取り組むよう周知することが大事だ」とした。

木下代表社員は「なぜGBに取組むのか」という根源的な部分の理解不足。面倒なことが増えたと感じている人が多し」と述べた。その上で、世界的な人口増加とエネルギー消費の爆発的増加の中で、「いまが楽しいのは、子どもや孫が暮らす未来を先食いしているからではないか。次の世代が生き残る地球を残すためには生き方を変えなければならぬ」と啓発・教育の必要性を訴えた。柳瀬代表社員も「環境や健康の性能評価システムであるLEEDやWELLの認証件数が増えな

GB普及のポトルネック

似内代表は冒頭、「実は、いまだにESGという言葉が真の意味では理解されていないのではないか。経済は、地球や社会があつてのことというところが、自分事としてしゃべられていないのではないか。受け身の姿勢が多く、チャンスとして生かすという気概が足りない」と問題を提起し、GBの取り組みが加速するためのポトルネックをパネリストに聞いた。池田マネジャーは、不動産開発事業者の立場として、経済性

国内市場は まだ空白地帯

学生の高橋さんは「GBという言葉を知らない、環境問題も何をすれば良いかわからない」という学生がほとんど。まずは数値などで（良さを）見える化することが大事だと思う」と分かりやすい情報発信を求めた。

GXのビジネスチャンス

続いて似内代表はGX（グリーン・トランスフォーメーション）のビジネスチャンスを議題とした。木下代表社員は、ESG投資、気候関連テクノロジーへの投資、トランザクションファイナンス、産業構造の変革の4つを挙げた。急拡大を続けるESG投資と気候関連スタートアップへの投資を事業機会と捉える風潮は広がっている。トランザクションファイナンスは「白か黒かの二者択一ではなく、過渡期の動きをサポートするビジネス」と説明。火力から再生可能エネルギーへの移行期の事業への金融支援が「注目の分野になっている」とした。

データセンター（DC）の開発に携わる池田マネジャーは、DCを「ものすごい電力を使う大きな箱」と表現した上で、「電気を食うため理解を得にくい」というピンチだからこそチャンスだとし、「サーバーの冷却を空冷から水冷に転換する際には設備会社にチャンスがあるし、再エネに切り替える場合には敷地外から再エネを供給するオフサイトPPA（電力購入契約）が必要になる。DCがグリーンな方向に進むところにビジネスチャンスがある」と具体例を示した。柳瀬代表社員も、LEEDがバージョンアップする度に認証要件が厳しくなっていることを紹介した上で、「どんなに

厳しくてもチャレンジして目標達成すること未来がある。認証は「もっと早く知れたかった。GB市場は）まだ空白地帯。若輩から構造設計者にも関わって（グリーンな設備などを使用する）ことを、当たり前にする（こと）起業者が参加してもらえほしい」と幅広い分野の事業機会がビジネスチャンスになる」とば「と期待を込めてディスカッションを締め切った。

GBJシンポジウム2023では、「WELL認証がもたらすビジネスチャンス」と題した講演も開いた。清水建設の沢田英一氏をモデレーターとして、実際にWELL（健康建築性能評価制度）認証を取得した企業の本業への影響などを紹介した。

オフィス空間の提案などオフィスソリューションを展開する清和ビジネス（東京都中央区）は、2018年に本社オフィスの改装でWELLの仮認証20年に本認証をそれぞれ取得した。一般的なオフィスだった本社での昇降デスク導入を契機に約10年かけて植栽や照明、香りなどを複合的に空間デザインしていった。WELL認証に取り組んだ結果、「販売していた昇降デスクの（良さを）エビデンス付きで社員が説明できるようになった」（丸山史夫働き方デザイン本部長）と社員の意識転換に寄与した。WELL認証と合わせて



(左から) 丸山氏、藤田氏とモデレーターの沢田氏

WELL認証取得で社員の意識変化

ABW（アクティブ・ベースド・ワーキング）にも取り組み「活動に応じて働く場所を選ぶことでコミュニケーションが活性化された」という。WELLに取り組んだことで「全ての取り組みが整理できた」と思いが非常に強い。オフィスの環境が明らかに変わり、仕事も健康意識もテクノロジーの活用も、社員の意識がどんどん変わった」と強調。「WELLはゴールではない。社内制度などを変える必要があるため、会社を巻き込んで取り組めた。これがきっかけで社員の意識が変わった」と紹介した。

アイリスグループのオフィス家具販売メーカーであるアイリスチトセ（仙台市）は、18年にアイリスオオヤマの東京事務所が浜松町に移転してグループの商材を体感できるライブラリーをを整える際にWELL認証を取得した。きっかけは「健康経営」の具体的な内容を社員が分からなかった。認証を取得することで働く環境の見える化につながる」（藤田幸介マーケティング本部WorkSpace Designマネジャー）ということだった。「会社の取り組みに対する社員の理解が深まり、帰属意識の向上にもつながる。WELL認証取得のオフィスで働くことが自慢になる」とし、それを商品の提案に生かした。清水建設がWELLの取得支援を担当し、自社商品を使ったWELL認証空間を整えた結果、「サーカディアン照明の導入で残業削減や生産性向上につながった。加えて「間違いなく、新規社員の採用率アップにもつながっている」と明かした。

